

平成紙



おりおりの記

90年の人生

公益財団法人 資本市場研究会
顧問

長岡

實

私は今年5月半ばに90才になる。1924年（大正13）年の生まれで、甲子園球場ができた甲子（きのえね）の年である。

90年という歳月は決して短いものではない。1945（昭和20）年以前が近代であり、以降が現代と歴史の時代区分もまたがり、日本の年号区分でいえば、大正、昭和、平成の3代におよんでいる。いろいろのことを経験してきたが、今日までの私の人生を通じて、2つの直線が交差しているように思われる。1つが上昇線であり、1つが下降線である。この2線が交差するのは1960（昭和35）年あたりであろうか。

上昇線は科学技術の発展を主因とする経済の豊かさ、生活の豊かさであり、下降線は残念ながら「心の豊かさ」の喪失である。何となくゆとりやうるおいが日本人の心から失われつつあるような気がして、淋しいことだと思っている。

関東大震災の翌年に生まれた私には、大正時代の記憶はゼロにひとしい。大正時代は、明治の先人たちが営営として築きあげた近代国家の基礎工事の上に、新しい日本文化を育んだ大正デモクラシーの時代だったようだ。昭和20年までは戦争が激化し、ついには破局をむかえる時代ではあった

が、幼いころの記憶をたどると、ほのほのとした人情味あふれる思い出がよみがえってくる。

いまと比べればもちろん生活は貧しく、日常生活を

取りまく環境も極めて劣悪であった。平均的日本人の食生活では卵や牛乳は病人優先だった。舗装道路は極めて少なく、交通手段も未発達、電話のない家も多かった。

それでも子供のころは楽しい思い出が多い。お正月には親戚も集まり、子供たちの遊び声が家にあふれた。街には獅子舞いや猿まわしなどが家家をまわり、空地があれば、男の子は^{たこ}凧上げ、女の子は^{はね}羽根突きをしていた。

時代の変化は如何ともしがたい。物質的には生活はますます便利に、豊かになるであろう。徒らに過ぎ去った日々を懐かしむのは無意味だが、せめて「心の豊かさ」だけは取りもどしたいものである。

